

# イスラーム教徒になりたいベイビ

フェビー・インディラニ 作 野中葉 訳

キヤイ・フィクリ※1が提起した議題によって、ウラマーたちの評議会は一瞬で騒がしくなった。なんと、ベイビという一匹の豚バビ※2が、イスラームに入信したいというのだ。議場のあちこちから「アスタグフィルツラー神よ、お許しを」という声が聞こえ、意見を述べたい者たちの手が一齐に上がり、また手を挙げて許可を取る必要もないと考える何人かの参加者は、そのまま声を上げ始めた。議長は、事態を收拾できずお手上げ状態で、結果、議事は三十分間中断ということになった。

その後、キヤイ・フィクリは議事を混乱させた張本人だとして尋問されることになる。いずれにしても、キヤイ・フィクリを尋問するというのは、簡単なことではなかった。なぜなら、彼は、敬愛されるキヤイとして一目置かれる存在だったからだ。背は低く、やせていて、華奢に見えた。けれども、眼差しは鋭く澄んでいた。人びとを惹きつける強いオーラを放っているようだった。外見からだけでは、年齢を推測するのは難しかった。短く整っているあごひげを見ると年配者のようだが、身体はきびきびと動き、全体としては若いようにも見えた。

彼は低い声で「こんにちは」と言った。議場全体が急にしんと静まり返った。

※1 インドネシア、特にジャワで、イスラーム寄宿塾を主宰する指導者やイスラームの知識を有する学識者を指す尊称。

※2 原文でこの豚の名前はbady。インドネシア語で「豚」はbabi（バビ）であり、Badyという名づけは、とかく毛嫌いされる「babi（豚）」をもじった掛詞であり、作者のユーモアだといえる。

「ベイビは、真剣にイスラームに入信したいと考えています。神の導きヒダーヤは誰にでも届けられるし、またヒダーヤによって誰もが変わる事ができると、私はそう信じています。もし我々がイスラームに公正という価値が含まれていると信じるのであれば、私たちはベイビに機会を与えてやるべきだと考えます」

「すみません、キヤイ」。一人の参加者が声を上げた。「ということは、ベイビは今後、あのおかしな振る舞いを変えるだろう、ということですか?」「「おかしな」というのは、私たちの主観でしかない。彼は、私たちとは違います。ベイビは、神の慣行スンナトツラーに従って、今後も豚であり続けるでしょう」

囁き声が、議場を埋め尽くした。一人の若い参加者が手を挙げた。「キヤイ、私はキヤイがなぜそこまでベイビを擁護するのか、その理由が知りたいです。でもその前に、キヤイがどのように彼女と知り合ったか、教えていただけませんか? 彼女は、禁じられたハラームな創造物ではないのですか?」

「私は、様々な家畜を飼育しています。豚もその一つです」。キヤイ・フィクは穏やかに答えた。「豚を食べることはハラームですが、飼うことはそうでないでしょう。違いますか?」

議場は再び騒がしくなった。キヤイはどうかしてるんじゃないか、皆、口々に囁き合った。

「えー、申し訳ありませんが、キヤイ、何のために豚を飼育しているのですか?」

「私は、とても貧しい生活を送っている農村の人びとに食べ物を提供しています。家畜する動物はどれもとても高価なのですが、豚は一回の妊娠で二十匹の子供を産みます。豚はとても多くの子供も持てる動物なのです。これが、私が最初に豚を飼おうと決めた理由です」

「なぜキヤイは、貧しい人たちに豚を食べ物として与えることに躊躇がないのですか?」

「彼らは本当にとっても貧しいのです。そして、彼らはムスリムではありません。彼らにとって、宗教はとても難しすぎて話すことが出来ません。彼らの宗教はおそらく、食べ物ときれいな水なのかもしれません」。キヤイ・フィクリは、瞬きもせずに自分を見つめる会議の参加者たちの顔を見回しながら、自分の見解を述べた。

私はこういう農民たちが暮らす農村に足繁く通い、豚の飼育小屋からほど近い、小さな礼拝所に宿泊します。そこでも他の場所にいる時と同じように、礼拝し、クルアーンを読誦します。そこでは、私が外に出ると、まるで何かを待っているかのように、いつも私を見てくる一匹の雌豚がいたのです。そして、いつも何かを言いたそうでした。その雌豚は、十五歳でかなり年を取っていて、もう妊娠することは出来ません。彼女は本当にいつもそうやって私を待ち、見つめ、何かを言いたげなので、私は、彼女にベイビという名前を付けました。彼女も、私が彼女にそういう名前を付けた、ということを理解しているようでした」

キヤイは、ため息をついて、しばらく沈黙した。「アッラーのお許しにより、彼女は自分の希望を話してくれ、そして、私はその意味を理解しました。彼女は、自分の人生の終わりに、イスラーム教徒になりたいと言いました。彼女は、自分に、まもなく屠殺の順番が回ってくることを分かっています。だから彼女は、自分の希望をかなえたがっています」

議場の雰囲気は、またもや、突如として騒々しくなった。多くの参加者が一斉に話し始めたからだ。あちこちで議論が始まった。

「高貴なキヤイがベイビと仲良くできると、どうなってるんだよ」

「絶対許せないだろ！ 豚にまつわるあらゆることがハラームなんだ。すべての要素がね。議論の余地なし！」

「イスラームに入信したいという者を禁じる権利が我々にあるのだろうか。だってイスラームは、万有への恵みじゃないか」

「ベイビのこれまでの宗教は何だったのだろう。どうして彼女は、今、イ  
スラームに入信したのか」

「もし我々がベイビの入信を禁じたら、我々は公正でないということになる。  
そして、不公正は、アッラーやアッラーの預言者が嫌われる性質じゃないか」

「でも、我々は、ベイビと同じ宗徒になりたいか？ そうなれば、我々人間の  
レベルを貶めてしまうのではないか」

「私たちとベイビの身体はとも似ているんだ。人間のDNAは、わずか三  
パーセントしか彼らと違わない。だから本当は、自分たちが考えているより  
ずっと、我々は彼らと近いんだ」

「それなら、彼女はイスラームに入信してもいいのか。だって、私たちは、  
豚のおかしなところを知ってるだろ。不潔で不真面目な性質を。それに、性格  
もはつきりしない。牙を持っていて猛獣かと思いきや、奪い合って木の葉を食  
べるところを見るとペットのように人間慣れもしている」

「ますます我々に近いように聞こえるな」

神よ、お許しを

「アスタグフィルッラー」という声が、議場のあちこちから再びこだます

るのが聞こえた。一人として、相手の言うことを聞いている者はおらず、各  
人が勝手に自分の意見を言いあうのに忙しかった。議長は、この問題を審議  
するため二時間の休会を命じた。参加者たちは自然と、意見の合うもの同士  
かたまって、ベイビの問題にどう対処すべきか議論し合った。

会議は再開し、結論を出すために、参加者たちによる投票が実施されるこ  
とになった。最初のグループは、最も人数が多く、参加者の約四十パーセン  
トを占める人たちで、彼らは、明白にベイビを拒否し、配慮も妥協も不要、  
と考える人たちだった。一方で、三十五パーセントの人たちは、原則的には  
賛成しないが、でも、ベイビの立場から意見を聞くため、ベイビを召喚すべ  
きと考えていた。このグループは、評議会が政治的に正しい態度を取るべき

であり、いかなることがあっても、公正の原則は崩すべきでない、と考えていた。第三に、二十三パーセントを占めるグループは、キヤイ・フィクリを支持する人たちだった。彼らは小さいグループだが、民衆から敬愛されている人たちが多く含まれていた。参加者たちのあいだで彼らの発言は尊重されていた。ただし、このグループには、キヤイ・フィクリを尊敬し彼の独自性を尊重するという理由だけで、賛成している人も含まれていた。残り、棄権者たちであり、彼らは、どんな形の対立も望まない人たちだった。それぞれのグループは、お互いに議論を戦わせたが、どのグループも過半数を占めてはいなかった。最終的な結論は出せなかった。夜も更けてきたので、議事は一端終了し、翌日に継続することになった。

翌日の会議再開までの間に、三十五パーセントを占める第二のグループには、第一と第三のグループが水面下で交渉を行っているように見えた。四十パーセントを占める第一のグループはもちろん、あと少し賛同者を得れば過半数を取れるとあって、三十五パーセントを占める第二のグループがそれほど強く倫理感を出さなければ、簡単に事が済むと考えていた。そもそもベイビの入信には賛成しないのだから、倫理観をことさらに押し出す必要もないだろうと、第一のグループは第二のグループを説得した。でも全体の三十五パーセントを占める第二グループの者たちは、手続きを重んじ、民衆の目に評議会が良く映ることを重視していた。

一方、二十三パーセントを占める第三のグループは、根本的に違った考えを持っていた。彼らもまた、三十五パーセントを占める第二のグループが自分たちのイメージや周りからの称賛ばかりを重視し、主張に一貫性がないということに憤っていた。けれども、この三十五パーセントという数字はかなりの多数派だったし、この第二のグループの彼らは依然として、いかにそれが表面的なものであったとしても、公平なプロセスを実行したいと思っていた。

第三の二十三パーセントのグループの人たちはこう考えていた。もし自分たちがベイビをこの会議に召喚することが出来たとしたら、それは大きな一歩となるだろうと。そして、「可能性はとても低いとしても、彼らの願い、つまりベイビの入信が認められる余地を残すだろうと。」

ベイビを会議に召喚するか否かということだけで、議論と交渉は大混乱に陥った。なぜならそれは、多くの参加者にとって、人生で生まれて初めて、豚と交流することになるからだった。解決策のないまま、議事は二日間延期された。

長いプロセスを終えた三日目、会議の参加者たちは、最終的に、全員が投票することとなった。結果は、ベイビのイスラームへの入信を評議会は公式に拒否する、というものであった。

キヤイ・フィクリの顔は曇ったように見えた。彼は、議事が正式に終了する前に、最後の言葉を述べさせてほしいと言った。

「何をにおいても、評議会の参加者全員がこれほどまでに熱心に議論に参加してくれたことに対し、感謝しています。ベイビが悲しむだろうと思うと、とても辛いのですが、故郷に戻り、彼女に伝えようと思います。ベイビ、「アッラー以外に神はなし」と、「ムハンマドは神の使徒である」という二つの言葉を証言すれば、誰でもムスリムになれますよ、と」。フィクリの目は潤んでいるように見えた。「イスラームに入信したいという人を止めることは誰にもできません。たとえば、イスラーム教徒がそれを拒絶したとしても。これを私はベイビに話したいと思います」

議場は静まり返り、一部の参加者はフィクリの言葉に感動し、また人生の終末にこのような拒絶に遭うベイビの無念さを思い、泣きそうになっていた。いずれにしても、決定はすでになされたのである。参加者たちはお互いに言葉を交わし、別れの挨拶をし、三日間にわたる議事中の失礼を詫びたり、感謝を述べたりした。

次々と参加者が議場から外に出ていくとき、そのうちの一人がキヤイ・フイクリの腕をつついて耳元でささやいた。

「キヤイ、キヤイの故郷まで一緒にしてもいいですか？」 彼は、少しもじもじしながら、恥ずかしそうに尋ねた。「もしベイビがイスラームに入信するならば、私は、ベイビの肉の味を試してみたいのです」

フェビー・インデイラニ著『処女でないマリア』(Pabrikultur、二〇一七)収録  
「イスラーム教徒になりたいベイビ」

※本作品は、『中東現代文学選2020』所収予定の作品です。

※本作品の無断転用を禁じます。著作権は著者・翻訳者に帰属します。